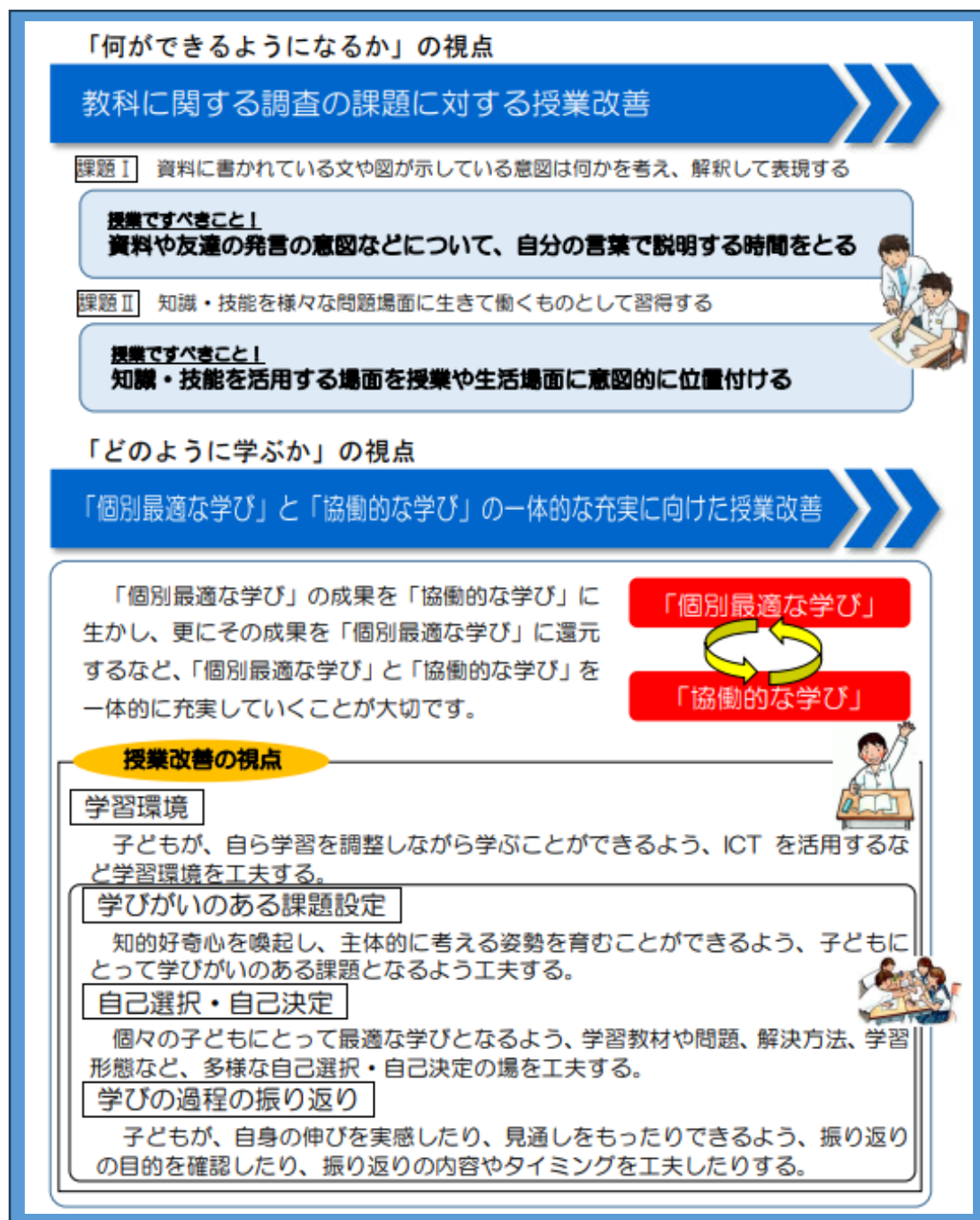


「主体的・対話的で深い学び」の実装に向けて

香川県教育委員会では、全ての子どもにこれからの社会で求められる資質・能力を育成することを目指しています。そのために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」をより一層具現化・深化させる実装の段階へと歩みを進めています。

その上で、昨年度（令和7年度）の全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、下のような「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」の2つの視点から授業改善を呼びかけています。



※ 「令和8年度 学校教育実践の手引」より引用

特集1では、これらの授業改善の視点から児童生徒質問調査および学校質問調査の結果を分析し、取組の成果と、さらなる充実に向けた提言をまとめました。

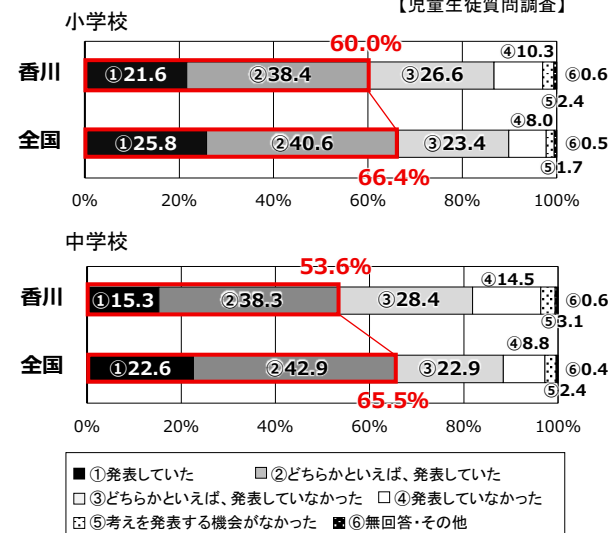
各校における取組の振り返りや、明日からの授業改善のヒントとしてご活用ください。

「何ができるようになるか」の視点で調査結果を振り返る

● 自分の言葉で伝えたり、まとめたりする機会を意識して位置付ける

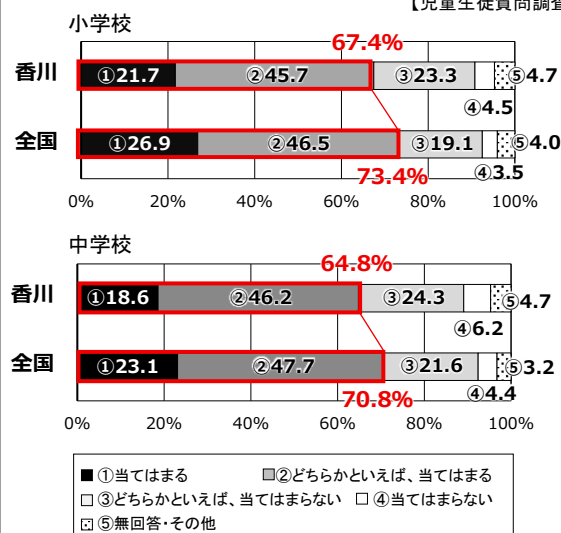
□38 5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか

【児童生徒質問調査】



□40 5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか

【児童生徒質問調査】



調査結果から、本県の子どもたちは「□38 自分の考えを工夫して伝えること」や「□40 学んだことを生かして自分の考えをまとめること」に、全国と比べてまだ力を伸ばせる可能性があることが見えてきました。

「この資料を使って考えの理由を教えて」「このグラフから何が言えるかな？」などと声をかけ、資料や文章を読み解き、相手に伝わるように話の組み立てを工夫して発表する経験をつくること、**課題Ⅰ**の解釈し、表現する力の育成につながります。

また、「これまでに習った考え方で使えるようなものはないかな？」と問いかけ、問題解決に向けて、学んだ知識を生かし、自分なりの考えをまとめる活動を仕組むことが、**課題Ⅱ**の生きて働く知識・技能の習得につながります。

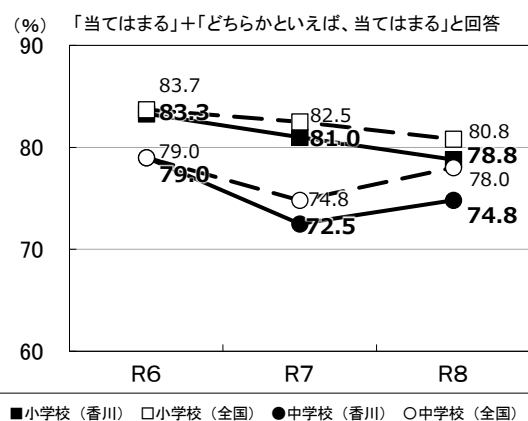
目の前の子どもたちの実態に合わせ、日々の授業の中で、こうした問いかけを取り入れることから始めてみませんか。

※課題Ⅰ、課題Ⅱ P4参照

● 「分かる」から「使える」へ！ 学びと日常をつなぐ授業づくり

□44 授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができますか

【児童生徒質問調査】



7割を超える子どもたちが「□44 授業で学んだことを、次の学習や生活に生かせる」と肯定的に捉えており、日々の先生方の指導の成果が表れています。

一方で、経年変化に目を向けると、小学校では肯定的な回答が減少傾向にあり、中学校では全国との差が開きつつあります。

知識を実生活で使える力へ引き上げるには、「下級生への発表(国語)」や「遠足の買い物計画(算数)」など、身近な課題を設定し、学ぶ必然性をもたせることが重要です。単元全体で学習をデザインし、「学んだ考え方をを使うと●●できた」と、日常とのつながりを実感できるようにすることで、知識は生きて働く力へと変わります。

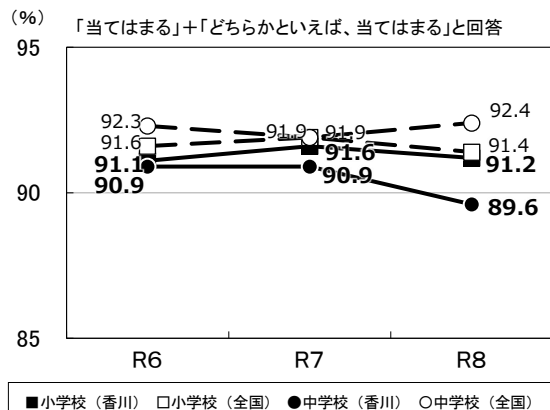
「どのように学ぶか」の視点で調査結果を振り返る

学習環境

違いを認めて協力し合える安心・安全な風土づくりを

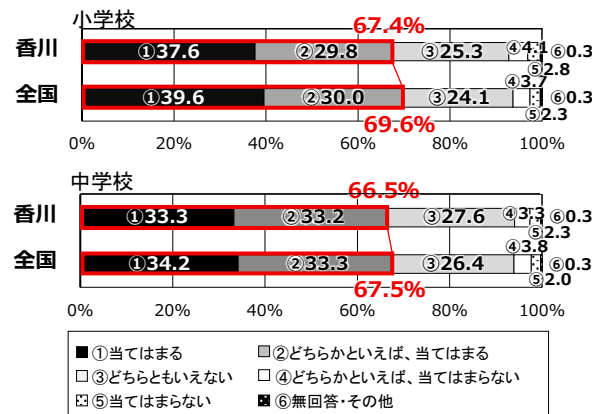
□46 授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に
して、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか

【児童生徒質問調査】



□20 あなたの学級では、人と違う意見を言っても否定されないと
思いますか

【児童生徒質問調査】



約9割の子どもたちが「□46 互いに協力しながら課題解決に取り組んでいる」と肯定的に回答しており、日々の先生方のご指導によって本県の強みとなっていると言えます。一方で、「□20 人と違う意見を言っても否定されない」と感じる子どもは、小・中学校ともに6割台にとどまっています。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、心理的に安心・安全な学習環境の整備が不可欠です。まずは、間違いや多様な考えを認め合う学級風土づくりから始めませんか。

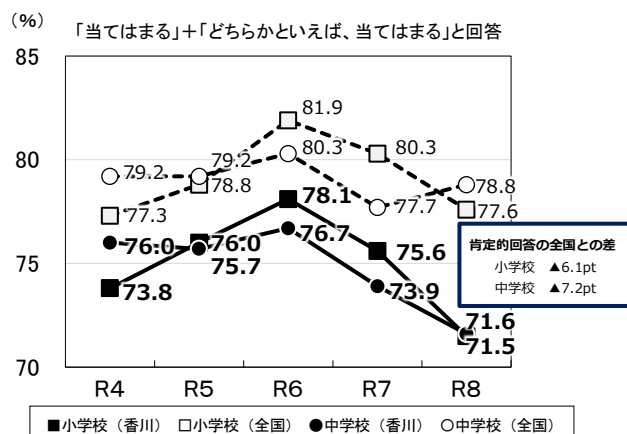
「そういう見方もあるんだ。おもしろいね」「●●さんが疑問を言ってくれたから、みんなの学びが深まったね」といった先生方の日々の温かい声かけが、子どもたちが安心して自己表現し、互いの違いを生かしながら学び合える土台となります。

学びがいのある学習課題 学びの過程の振り返り

振り返りを生かした自分事の学習課題を

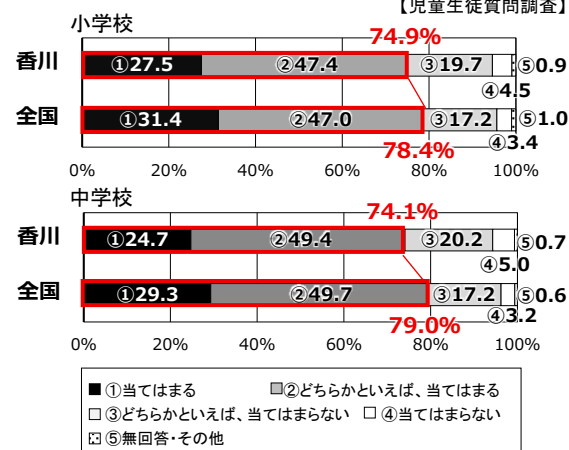
□39 5年生まで（1、2年生のとき）に受けた授業では、課題の
解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか

【児童生徒質問調査】



□43 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった
点を見直し、次の学習につなげることができていますか

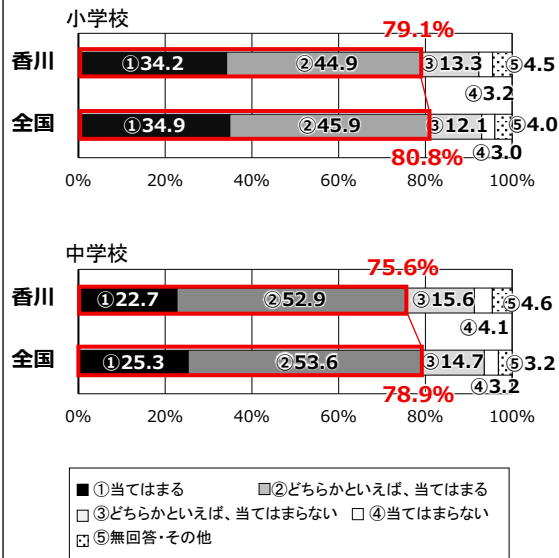
【児童生徒質問調査】



調査結果から、「□39 自ら課題に取り組む姿勢」や「□43 振り返りを次の学習に生かす力」に課題があり、主体的な取組は減少傾向にあります。

学びを自分事するには、日々の振り返りの工夫が鍵を握ります。授業の終末に「次はどんなことを知りたいか」「どう生かしたいか」と問いかけ、その振り返りを次の課題設定に生かしてみませんか。自身の疑問や思いが次への見通しにつながる経験が、主体的な学びを引き出します。

□41 5年生まで(1、2年生のとき)に受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか
【児童生徒質問調査】



小・中学校ともに約8割の子どもたちが肯定的な回答をしており、多くの授業で自己選択・自己決定できるよう配慮がなされていることがうかがえます。しかし、依然として全国平均を下回っているのが現状です。

学力向上モデル校の実践に学ぶ

自分に合った学び方を選ぶ環境をデザインする工夫として、学力向上モデル校(中学校外国語科)の実践を紹介します。

授業冒頭の暗唱の帯活動では、生徒自身が制限時間内にどこまで挑戦するかという目標を決めて取り組みます。自分の力に合わせて取り組み方を選択することで、主体的に学習へ向かうことができていました。

また、ALTに日本語を伝える協働学習の場面では、全体で共有された複数の改善方法(ジェスチャーを交える等)の中から、生徒自身が自分たちの班にふさわしい手段を選び、練習方法を工夫していました。

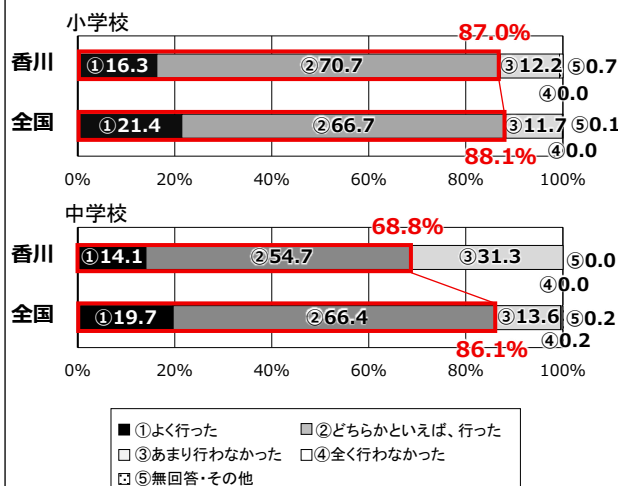
こうした授業内の小さな選択と決定の積み重ねが、自分に合った学びを見つける力を育むことへとつながります。



● 点と点の知識をつなぎ、問題解決に生かす授業づくりを

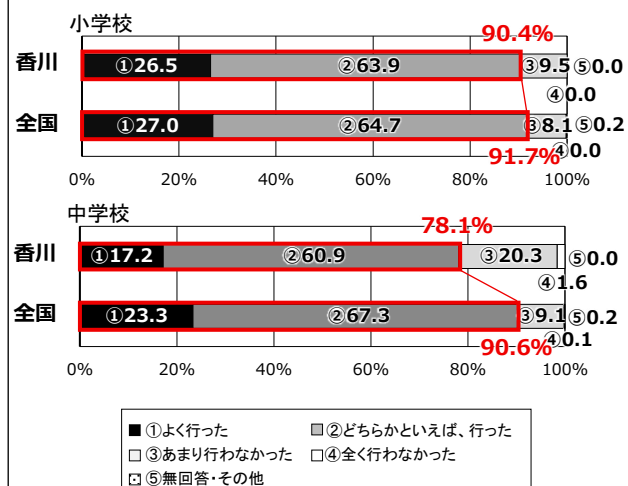
■34 調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか

【学校質問調査】



■35 調査対象学年の児童(生徒)に対して、前年度までに、関連する既習事項を振り返り、知識を総合的に関連付ける学習活動を行いましたか

【学校質問調査】



学校質問調査から、活用を意識した授業づくりの課題が見えてきました。特に中学校において、「■34 学習過程を見通した指導」や「■35 既習事項を関連付ける学習活動」を実施している割合が、全国を大きく下回っています。

生きて働く知識・技能は、これまでに学んだことを活用した主体的な問題解決の中で育まれます。例えば、授業の振り返りにおいて、「前に習った●●という考え方で解決できた」「これも同じだね」と、知識と知識を関連付ける経験の積み重ねが、自ら学びに向かう力を育みます。

日々の教材研究の中で、「習得と活用のサイクル」を意識し、子どもたちが既習事項を生かして問題解決に向かえる授業をデザインしていきましょう。子ども任せの放任ではなく、専門職としての教師による意図的な働きかけこそが、生きて働く知識・技能の定着につながります。